

九州北部のマリーナにおける利用状況および利用者の意識調査結果の分析

九州共立大学工学部 学生会員 武田 雄
九州共立大学工学部 正会員 片山 正敏

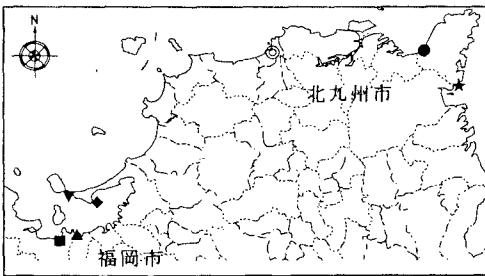
1. 研究目的

近年、国民生活の向上や余暇時間の増加にもなって、ウォーターフロント（沿岸域）開発の一環としての、マリンレジャー施設の開発・整備が進められている。これらは、ウォーターフロント開発には欠かせない施設になっているため、その基本計画にあたっては、利用者の要望を十分に反映させることが大切である。

このため、本研究では、都市臨海部における水辺空間の利用状況および利用者の意識調査として、九州北部のマリーナ7ヶ所において実施してきたアンケート調査結果の分析を行う。

2. 調査場所

現在までの調査場所を図一に示す。



図一 アンケート調査場所

(注) ■ 福岡市立ヨットハーバー ◆ 海の中道マリーナ
▲ マリノア ▼ 福岡マリーナ ● 小倉マリーナ
★ 新門司マリーナ ◎ ヨットハーバー芦屋

3. 分析内容

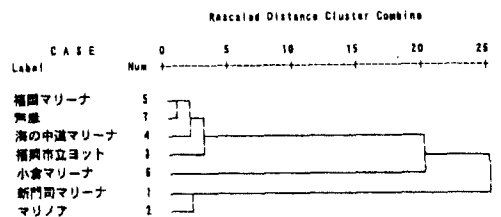
九州北部の7ヶ所のアンケート調査結果について、SPSSによるクラスター分析、コレスポネンズ分析を行った。クラスター分析を行った項目は、「来訪者の年齢・性別・職業・区分・来訪目的・船上での行動目的・マリーナまでの所要時間・海との係わり」の8項目、コレスポネンズ分析は、「施設に関する満足度・来訪後のイメージ」の2項目である。

4. SPSSによる分析結果

(1) クラスター分析の結果

「来訪の目的」のクラスター分析によると、7つのマリーナは、「新門司マリーナ、マリノア」(以下前者)と、「福岡市立ヨットハーバー、海の中道マリーナ、福岡マリーナ、小倉マリーナ、ヨットハーバー芦屋」(以下後者)の2つに分類することができる。(図一2参照)

この2つのグループを設立年代で見ると、前者は、1990年代と近年に設立されており、後者は、1990年以前に設立された施設であることがわかる。前者に共通しているのは、クルージングの割合が少なく、休憩、施設見学、食事の割合が多くなっている。特にクルージングが10%にも満たないという意外な結果になっているが、この2つのマリーナには、比較的規模の大きなレストランなどが付帯営業されており、船を利用しない人でも十分に利用できるマリーナ施設であることがわかる。また、20歳代のデートスポットとして利用されている。そして1990年以前設立のマリーナは、クルージング、釣りといった目的が多いため、直接海で行動するという目的だけを持った利用者が集しめる施設となっている。



図一2 来訪の目的についての分析結果

(2) コレスポネンズ分析

① 施設に関する満足度

小倉マリーナ、福岡マリーナ、海の中道マリーナの利用者は、施設に関する満足度が高くなっていることがわかる。福岡市立ヨットハーバー、ヨットハーバー芦屋の利用者は、普通という評価をしているが、「普通」という中間回答は、「満足」という+の評価の近くにあ

る。マリノア、新門司マリーナは、少し満足度が低くなっている。この2つのマリーナは、規模が大きく、一般の利用者も多いため、アンケート調査により、増設希望施設が数多くあがっていることがわかる。遊園地、商業施設などの併設や、公園や親水性など、自然の多いものになってほしいという希望が数多くあったためだと考えられる。(図-3参照)

なお、コレスポンデンス分析では、似たような列の構成になる行同士は近くに配置され、似たような行の構成になる列同士は近くに配置され、関係の強い行と列は近くに配置されるように、座標の数値を算出している。

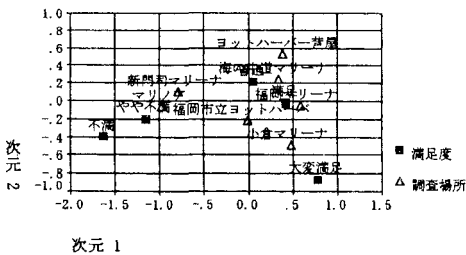


図-3 施設に関する満足度についての分析結果
②来訪後のイメージ

小倉マリーナの利用者は、来訪後のイメージが、かなり高い評価となっていることがわかる。福岡マリーナ、ヨットハーバー芦屋、海の中道マリーナの利用者は、同じようなイメージを持ち、高い評価をしていることがわかる。新門司マリーナ、福岡市立ヨットハーバーは、普通という評価になっているが、「普通」という中間回答は、「楽しい」という+のイメージの近くにある。マリノアの評価は、少し低くなっている。施設に関する満足度が低いことが影響しているといえる。(図-4参照)

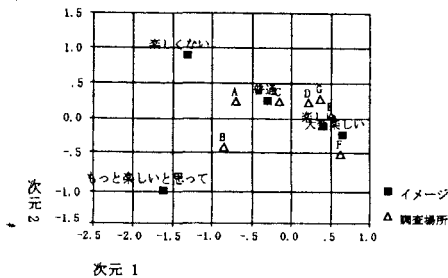


図-4 来訪後のイメージについての分析結果

(注) A:新門司マリーナ B:マリノア C:福岡市立ヨットハーバー D:海の中道マリーナ E:福岡マリーナ F:小倉マリーナ G:ヨットハーバー芦屋

5. マリーナの比較に関する考察

これまで行ってきた分析により、7つのマリーナが、年代によって分類できるような特徴を持っていることと、利用者側からみたマリーナのあり方がわかった。

1990年以降に建設された新門司マリーナ、マリノアなどは、直接海で行動するという目的を持っていない人も考慮した付帯施設の充実が図られていることがわかる。そのため、来訪者の区分も、船艇オーナーや、クルーの割合が6%と非常に少なくなっている。

しかし、1970年代に建設された福岡市立ヨットハーバー、福岡マリーナ、小倉マリーナ、ヨットハーバー芦屋に関してはまったく逆の結果が出ている。来訪の目的は、海に依存したもののばかりであり、一般の利用者の割合も25~50%にとどまっている。

1980年代に建設されている海の中道マリーナに関しては、一般の利用者が約60%と、70年代のものより若干多くなっていることがわかる。来訪者の区分でグループ分けをすると、70年代のほうに近くなるが、レストラン、テニスコート、水族館などの付帯施設の充実が図られていることを考慮すると、90年代のグループに属するのではないかと考えられる。

70年代、マリーナは、船の利用者を中心に建設されていたが、しだいに一般の利用者も考慮して建設されるようになってきたことが分かる。しかし、一般の利用者の割合が多くなっている近年建設されたマリーナほど、施設に関する満足度、来訪後のイメージの評価は低くなっている。つまり、利用者の要望が多くなるといえる。利用者は、マリーナという施設に対し、船を利用しなくても十分に楽しめたり、心を癒すことができるような空間であることを望んでいることがわかる。

「参考文献」

- 1) 九州マリン事業協会:マリンガイド in 九州&沖縄 2000.3.
- 2) 横内憲久:ウォーターフロント計画ノート 1994.11.
- 3) 石村貞夫:多変量解析のはなし 1998.4.
- 4) 鮫島幸一:福岡市立ヨットハーバーの利用者の意識調査,平成8年度 土木学会西部支部研究発表会講演概要集